



## 校歌の想いで

—昭和25年—

中島 嘉治

今から48年前の昭和25年8月、第2期工事で新たに8教室の増築完成。これまで町内別々の中学校が、名実共に学校組合立紫香楽中学校としての形が整ったのです。

このことを記念し、祝賀会が開催されました。式場は信楽小学校、今はなき古風な中にどっしりとした格式を備えた講堂でした。

町内外の多くの来賓PTAの方々の集まりの中での盛大な祝賀式だったことを記憶しています。

かまぼこの板を並べたような木琴、空気が抜けあんま膏薬（真っ黒なサロンバスと思って下さい）でふたをしたアコーディオン、オルガン、調子の狂ったビスの抜けたハーモニカ。さしづめ下町の古物屋さんの店先を思わせる楽器集団、でも40名以上もの集まりです。

生徒達は、気色満面緊張気味ながら明るい雰囲気をたたえて、新築の喜びを懸命に奏でてくれました。ハイドンのおもちゃの交響曲や行進曲などでした。ところが演奏半ばにして居並ぶお客様達が、目の前に置かれた祝賀用の折り詰めや2合のお酒の瓶に手をつけ始め、宴会が始まりました。私は若かったせいもあり、カッ！！となりました。まじめな気持ちを酒の肴にすることは・・・と。しかし、子供達にはそんな不愉快な気持ちを伝えてはいけないと、せっかくの楽しい演奏はきちんと済ませさせたいと怒りの気持ちを抑えて予定の全曲の演奏は済ませました。

終了の拍手はうれしかった。けど訝然としない。礼もしないで撫然とした態度で子供達を退場させました。会場は多少異様な雰囲気を感じたが、私の気持ちをわかってのことではない。

新しい校舎へ子供達をつれ戻った直後、河合校長が校長室に来てくれるようとの連絡があった。校長室へ入ったところ、私を引っ張って真新しい校長用の椅子にかけさせ、自分は床に膝をつき手をついて“すまなかった！！”と深々と頭を下げてただ一言。

私はただ呆然、しかし校長に理解していただけた気持ちに一種の畏れを感じたのでした。

“今後、私が指揮棒をもったら誰もしゃべらせへん。”これだけの一言が、今の校長の真摯な心に応える精一杯の気持ちでした。

私の45年間の音楽教師としての生涯への出発となったのです。

その年の確か1学期頃だったかと思う。

“校歌を創ろうと思うが君はどう思うか。”

その言葉の後はもうできていたのです。

“校歌を創ったが見てくれ、どうか。”だったのです。もう何回も推敲を重ねられたあと感じられる随分と格調の高い詩でした。

“曲は君に任せる。”

